



ヒバクシャ地球一周 証言の航海 Global Voyage for a Nuclear-Free World Peace Boat Hibakusha Project



〒169-0075
東京都新宿区高田馬場
3-13-1-B1
TEL: 03-3363-7561
FAX: 03-3363-7562
<http://www.peaceboat.org>

2025年8月7日

ピースボート Voyage120「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」 ～改めて被爆者の声に耳を傾け、記憶をつなぐ～ プロジェクトの概要とその成果

- クルーズ ピースボート・地球一周の船旅 Voyage 120
- テーマ 「改めて被爆者の声に耳を傾け、記憶をつなぐ」
- 期間 2025年4月23日(水)～2025年8月7日(木) 横浜発着 計107日間
- 寄港地数 18か国 21寄港地
- 使用客船 パシフィック・ワールド号
- 主催団体 ピースボート
- 参加被爆者 4名
倉守照美(長崎被爆／横浜から横浜)
伊藤正雄(広島被爆／横浜からバンクーバー)
福島富子(長崎被爆／横浜からシンガポール)
渡辺淳子(広島被爆／ニューヨークからプンタレナス)
- 証言活動 15か国16都市にて実施
- 後援
広島市／長崎市／平和首長会議／日本原水爆被害者団体協議会
公益財団法人広島平和文化センター／公益財団法人長崎平和推進協会

●主な活動と成果

- ①広島・長崎の原爆や世界各地の核実験が人間に何をもたらしてきたのか、後世に渡ってどのような影響があるのか被害の実相を伝え、核兵器禁止条約への批准を訴えるとともに、核廃絶に対する活動の機運を高めた。(ポートルイス、ケープタウン、ル・アーブル、ベルゲン、ニューヨーク、モンテゴベイ、クリストバル、マンサニージョ)
- ②世代と国境を越えた多くの人々とともに過去の経験から何を学び、今後の世界の平和構築のため何ができるのか具体的な歩みや継承について考えた。(深圳、ハロン、シンガポール、テネリフェ、ゼーブルージュ、ハンブルク、プンタレナス、バンクーバー)



中国(深圳)/ベトナム(ハロン)/シンガポール/モーリシャス(ポートルイス)/南アフリカ(ポートエリザベス/ケープタウン)/スペイン(テネリフェ島)/ポルトガル(ポルト)/フランス(ル・アーブル)/ベルギー(ゼーブルージュ)/ドイツ(ハンブルク)/ノルウェー(ベルゲン)/アイスランド(レイキャビク)/米国(ニューヨーク/シトカ/スワード)/ジャマイカ(モンテゴベイ)/パナマ(クリストバル)/コスタリカ(プンタレナス)/メキシコ(マンサニージョ)/カナダ(バンクーバー)

■参加被爆者



倉守 照美(くらもり てるみ) 横浜～横浜
長崎被爆 1944年1月8日生まれ 被爆当時1歳
長崎県長崎市在住

爆心地から5.8kmの地点で被爆。母親と幼い兄弟と一緒に防空壕へ避難していたため無事。被爆当時1歳であり記憶はないが「長崎を最後の被爆地に」という想いから多くの活動に尽力してきた。
2017年3月には高校生1万人署名の高校生たちと在韓被爆者と被爆証言や交流・意見交換などをおこなった。2024年12月、「祝！日本被団協ノーベル平和賞授賞式行動ツアー」(原水爆禁止日本協議会とピースボート共催)で、授賞式のパブリックビューイング、ノルウェーの平和団体主催イベント、松明パレードなどに参加。



伊藤 正雄(いとう まさお) 横浜～バンクーバー
広島被爆 1941年1月31生まれ 被爆当時4歳
広島県広島市在住

爆心地から3.2km地点の自宅前の道路で三輪車に乗って遊んでいるときに被爆。爆風により吹き飛ばされるも軽傷ですみ、逃げ込んだ防空壕で黒い雨に遭う。被爆後数日間、家の近くの公園で数えきれないほどの遺体を茶毘に付す様子が脳裏に焼き付き、いまだに忘れられない。
2010年、ヒロシマピースボランティアとして活動を開始。2012年から広島市の伝承者養成事業に参加し継承活動に尽力。現在まで、広島を訪れる世界からの旅行者を資料館に案内し続けている。



福島 富子(ふくしま とみこ) 横浜～シンガポール
長崎被爆 1945年1月21日生まれ 被爆当時生後6か月半
神奈川県原爆被災者の会(日本被団協の神奈川県組織) 副会長 葉山支部会長

爆心地より2.5kmの自宅で被爆。自宅と爆心地の間に小高い丘があり直接的な被害を免れる。4歳の頃に家族より一人離され親戚の家に預けられて、被爆を知らずに育つ。
親戚の家で着物に親しみ、現在はPeaceの文字を刺繍した平和の帯で被爆証言をおこない、2022年核兵器禁止条約第1回締約国会議から2025年の第3回同会議まで大学生にその平和の帯を託す。被爆当時の記憶はないが、2024年4月より現在94歳の長崎被爆者の交流証言者に認定され、講話活動をおこなっている。2015年、NPT再検討会議要請代表団としてニューヨークへ渡米。2024年12月、「祝！日本被団協ノーベル平和賞授賞式行動ツアー」に参加。



渡辺 淳子(わたなべ じゅんこ) ニューヨーク～プンタレナス
広島被爆 1942年11月28日生まれ 被爆当時2歳
ブラジル在住

広島で爆心地より18km地点にて黒い雨を浴びて被爆。1967年に結婚を機にブラジルに移住をした。38歳の時に広島に里帰りをした時に、両親より被爆者であることを告げられる。2003年にはブラジル被爆者平和協会に入り理事として携わる。在外・国内被爆者と差別の無い援助を求め日本政府との交渉やブラジルでの被爆証言・放射能被害者との交流をしてきた。2013年から被爆証言を盛り込んだ演劇を始め、これまでに57回公演を実施した。2024年12月、日本被団協代表団の一人としてオスロを訪れノーベル平和賞授賞式や晩餐会などの公式イベントに参加したほか、「ヒバクシャと若者の交流」をテーマとする被爆証言会でもノルウェーの高校生へ向けて証言を行った。

■プロジェクト水先案内人



Mary Dickson (メアリー・ディクソン) ベルゲン～ニューヨーク
脚本家、風下住民

作家・脚本家・ユタ州ソルトレイクシティ出身の風下住民、甲状腺がんサバイバー。核実験被害者への援助を国際的に訴える活動家。日米の学会やフォーラムで核兵器の人間への影響について幅広く執筆や講演活動を行う。過去4年間、風下住民やウラン鉱山で働く労働者、また米国各地の支援団体と共に、核実験と核兵器製造による被害者への補償を拡大するよう米国議会での法案制定のために尽力してきた。ドキュメンタリー映画でのインタビュー多数。戯曲『Exposed』は批評家から絶賛され、全米各地のステージ上での朗読作品として上演されてきた。2012年、核実験被害者たちのために行った長年の功績が認められ Alliance for Nuclear Accountability (核のアカウンタビリティのための連合) から栄誉を称えられた。

● 寄港地での活動

4月28日 深圳(中国)

活動都市: 深圳

発言者: 吉岡達也、福島富子さん(船内証言会／約50人)

ピースボートが国際運営団体を務める「武力紛争防止のためのグローバルパートナーシップ(GPPAC)」で繋がりのある「チャハル・インスティテュート(察哈尔学会)」と「東北アジア平和構築インスティテュート(NARPI)のメンバーを船内に招き「Time for Peace: Building Peace and Friendship in Northeast Asia」と題したイベントを実施した。そして各メンバーと被爆者が互いの経験を共有しながら、過去を繰り返さないためにどのように継承し平和を構築していくのかについて話し合った。

4月30日 ハロン(ベトナム)

活動都市: ハロン

発言者: 川崎哲、倉守照美さん、吉岡達也(船内交流会、パネルトーク／約200人)

ベトナム戦争終結50年を迎える日に寄港。長年カウンターパートナーを務める枯葉剤被害者の会などのベトナム友好団体連合とともに「Time for Peace -Writing the next chapter(平和の時-次の章を描く-)」と題したイベントを実施。パネルディスカッションにて、過去の悲惨な経験をどのように乗り越え平和を築いていくのかを話し合った。

5月4日 シンガポール

活動都市: シンガポール

発言者: 倉守照美さん、福島富子さん(UWCの学生に向けた証言会／約150人)

「血債の塔」や国立博物館を訪れ、シンガポールの建国や日本侵略時代について学びを深めた。また、インターナショナルスクール United World College の生徒へ向けた被爆証言会を実施。被爆者の福島さんから「自分が得意なこと、好きなことを通して平和を広めることはできる。どうかみなさんも平和を築いていってください」と、学生へ向けて言葉を贈った。

5月14日 ポートルイス(モーリシャス)

活動都市: ポートルイス

発言者: 伊藤正雄さん、倉守照美さん(訪船ビジターに向けた証言交流会／22人)

水先案内人としても乗船いただいたナディーム・ナズラリ准教授やピースボート災害支援センター(PBV)の関係者を招き、船内見学と被爆者との交流時間を設けた。過去に起こった座礁事故によって重油で海が汚れてしまったことを例に、核実験や核兵器使用も同じように環境を破壊する一因であることを共有した。



5月23日 ケープタウン(南アフリカ)

活動都市: ケープタウン

発言者: 伊藤正雄さん、川崎哲、倉守照美さん(ツツ財団と現地関係者への交流証言会／約40人)

デズモンド&リア・ツツ・レガシー財団と共催で、地元活動家や市民を招いたイベントを実施。被爆証言の他に、有識者らが「なぜ核兵器のない世界を目指す必要があるのか」や「核廃絶に成功した南アフリカの今後の役割」について話し、人権や原子力など多方面から「核」について考えた。

6月4日、5日 テネリフェ(スペイン領カナリア諸島)

活動都市: テネリフェ

発言者: 伊藤正雄さん、倉守照美さん(訪船ビジターに向けた証言会／65人)

地元の活動家やコミュニティで繋がりのあるメンバーを船内へ招待し被爆者と交流。被爆証言を聞き、これからの平和構築のためにどんな活動ができるのかを話し合った。

6月11日 ル・アーブル(フランス)

活動都市: ゴンフレヴィル

発言者: 伊藤正雄さん、倉守照美さん(ゴンフレヴィル市の中学生と市民に向けた証言会／約150人)

ICAN フランスと平和首長会議に賛同しているゴンフレヴィル市とともに被爆証言会を実施。学生からの質問に答えるため、被爆だけでなく、戦争が起こるとどのような被害が起きるのか、なぜ今も核兵器は存在し続けるのかを伝えた。また地元議員が、核保有のために使われている予算を医療や教育に使うことが出来れば、日々の生活の中でよりよい質のサービスを受けることができると説明。

この証言会には近隣市の市長も参加。その後新たに、オン・フルールとパール＝レ＝ペムの2つの自治体がICANのシティーアピール(自治体レベルで核兵器拒否を表明する書面)に署名・加入した。オンフルール市長は被爆証言会に出席しており、署名に繋がった理由は「被爆者の声を聞いて心動かされた」と述べている。



6月12日 ゼーブルージュ(ベルギー)

活動都市: ブルージュ

発言者: 伊藤正雄さん、川崎哲、倉守照美さん(現地平和団体との交流証言会／約200人)

ブルージュ市のダーク・デ・ファウ市長やルーベン平和団体をはじめとした現地パートナー団体による平和イベントが開催された。登壇者の一人である被爆者の倉守さんは、船内で出会った戦時性暴力被害者(SEMA)の話にも触れ、戦争は過去のものではなく今も続いている現実だということを伝えた。

6月14日 ハンブルグ(ドイツ)

活動都市: ハンブルグ

発言者: 伊藤正雄さん、倉守照美さん(訪船ビジターとの交流／約70人、ハンブルグ大学での証言会／約50人)

戦跡や博物館にて戦時中のハンブルグ市民の暮らしや空爆による被害を学び、戦争は加害と被害をわけて考えることが難しいことを共有した。また学生や市民に向けて証言会を実施。



6月16日、17日 ベルゲン(ノルウェー)

活動都市:ベルゲン

発言者:伊藤正雄さん、川崎哲、倉守照美さん(地元議員との朝食会、現地高校生との交流証言会／約50人、現地市民や平和団体関係者への証言会／約100人)

ICAN ノルウェーメンバーの協力のもと、被爆者が地元議員や高校生と交流し、核兵器は非人道的な被害を及ぼすだけではなく環境破壊など多角的な面から平和を奪っていく存在であることを共有した。また多くの平和団体を招待したイベントも開催し、被爆証言や被爆バイオリンの演奏、有識者のパネルトークを通して、核兵器を廃絶することがいかに身近な平和を守ることに繋がるかを話し合った。



6月21日 レイキャビク(アイスランド)

活動都市:レイキャビク

発言者:伊藤正雄さん、川崎哲、倉守照美さん、メリッサ・パークさん、(ホフディ・ハウス訪問、船内パネルトークイベント／40人)アメリカのレーガン大統領と旧ソ連のゴルバチョフ書記長による軍縮に向けた歴史的会談のおこなわれたホフディ・ハウスを訪問し、当時の状況や行なわれた意義などを学んだ。また、ICAN事務局長のメリッサ・パーク氏なども交えてパネルディスカッションを実施。若い世代に身近に核問題を感じてもらうには、自身と近い年代層も被害に合っていたことや、環境や教育といった面にも影響を及ぼすといった多角的な伝え方をしていく必要があることを共有した。



6月29日、30日 ニューヨーク(米国)

活動都市:ニューヨーク

発言者:川崎哲、倉守照美さん、高尾桃子、吉岡達也(国連共催イベントでの被爆証言とパネルトーク／約200人)

倉守さん自身の経験から、被爆は当時だけではなく長年に渡って影響を与え、その情報は正しく共有されず差別の対象になることを訴えた。またカザフスタンの核実験被害を啓蒙し若者主導の核兵器廃絶を求める団体「Steppe Organization for Peace(STOP)」の代表を務めるアリシエル・ハッセンガリーエフさんも登壇し、放射能の影響はその後の世代にも影響を及ぼし苦しんでいる人たちがいることを訴えた。

7月5日 モンテゴベイ(ジャマイカ)

活動都市:モンテゴベイ

発言者:倉守照美さん、渡辺淳子さん(現地学生や平和団体関係者へ向けた被爆証言会／約100人)

駐日ジャマイカ大使のショーナ=ケイ・M・リチャーズさんや「西ジャマイカの女性」創設者であり代表を務めるジャネット・シルベラさん協力のもと証言会プログラムを実施。証言会には駐ジャマイカ日本大使の渥美恭弘さんも参加。リチャーズ氏が核廃絶運動に力を入れ始めたきっかけが被爆者との出会いだったことや、核なき世界をつくるには被爆者だけではなく、世界中の人々が協力しあうことが大切だという被爆者の想いを共有した。



7月7日 クリストバル(パナマ)

活動都市: クリストバル

発言者: 伊藤正雄さん、倉守照美さん(訪船した政府関係者との交流証言会／17人)

政府関係者に向けて被爆証言を通して核の被害を共有するとともに、トラテロルコ条約の制定など核なき世界へのリーダーシップを取っている中南米地域に向けて感謝を伝えた。また、これから被爆者の生の声が聞けなくなる時代に、どのように核廃絶を訴えるのか具体策について話し合った。

7月10日 プンタレナス(コスタリカ)

活動都市: サン・ホセ

発言者: 伊藤正雄さん、倉守照美さん、渡辺里香、長與茅(国連平和大学関係者との交流証言会／約50人)

首都サン・ホセ近郊にある国連平和大学を訪問し、大学の創設経緯や「平和を愛する者から学べば戦争思想は育たない」という理念などを学んだ。また学校関係者や学生に向けて被爆証言を実施し、核兵器による放射能被害は時代を越えて後世にも影響があることを伝えた。

7月14日 マンサニージョ(メキシコ)

活動都市: マンサニージョ

発言者: 伊藤正雄さん、倉守照美さん、渡辺里香、高尾桃子(マンサニージョ工科大学の学生に向けた証言会／約250人)被爆証言会には学生のほか、近隣市の市長や議員室秘書も参加するほか、会場に来れない方に向けたライブ中継も行なわれ関心の高さが伺えた。核保有国に、核兵器に頼らない政策を考えてもらうためにどのようにアプローチするのか、核廃絶活動が続ける原動力についても共有し、互いにこれから連帯し核のない世界を目指し行動する士気を高めた。



7月21日、22日 バンクーバー(カナダ)

活動都市: バンクーバー

発言者: 倉守照美さん、渡辺里香、長與茅(サイモンフレイザー大学にて証言会／約50人)

証言会には学校関係者や学生のほかに近隣市長や在バンクーバー日本国大使館の岡垣里美副総領事も参加。ピースボートや今クルーズでおこなっているTIME FOR PEACEプロジェクトについての紹介と被爆証言を実施。パグウォッシュ会議が始まった国で研究者や被爆者だけでなく、市民が協力し核廃絶に向けて活動する重要性を共有した。

7月28日 スワード(米国アラスカ州)

活動都市: スワード

発言者: 倉守照美さん、渡辺里香(訪船した地元ロータリークラブメンバーとの交流と被爆証言／25人)

核兵器による放射能の影響は使用された土地だけではなく、風によって運ばれ世界中すべてが風下になり被ばくする可能性があり、人間だけでなく自然界の生態系にも影響を及ぼすことを共有した。

【その他の寄港地】

ポートエリザベス(南アフリカ)、ポルト(ポルトガル)、シトカ(米国アラスカ州)

●船内での活動

《主な交流相手》

■ 水先案内人

四角大輔さん(作家、森の生活者、環境保育アンバサダー)
井上高志さん(NPO 法人 PEACE DAY 代表理事)
品川夏乃さん(紛争地域における環境問題の専門家)
のはらヒロコさん(ミュージシャン)
吉岡淳さん(カフェスロー代表、カフェローカル代表、NHK 文化センター世界遺産講師、元日本ユネスコ協会 連盟事務局長、ナマケモノ倶楽部理事)
ヤスナ・バステイチさん(ジャーナリスト、ピースボートスタッフ)
ミランダ・シュラースさん(ミュンヘン工科大学公共政策・政治学ミュンヘン校 気候・環境政策学部主任教授)
中谷剛さん(通訳、翻訳家)
メリッサ・パークさん(核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)事務局長)
ショーナ・ケイ・M・リチャーズさん(駐日ジャマイカ大使)
工藤律子さん(ジャーナリスト)
コロネりかさん(ソプラノ歌手、ホワイハンドコーラス NIPPON 芸術監督)
東北アジア地域平和構築インスティテュート(NARPI)
武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ(GPPAC)
ズムナコ・モハマト・アフマドさん(イラン・イラク戦争で使用された化学兵器の生存者)
テヘラン平和博物館ボランティアスタッフメンバー(Tehran Peace Museum)

■ 多国籍な参加者

ピースボートクルーズ Voyage 120 約1,700名の参加者のなかには、日本国籍の方以外にも、中国、韓国、台湾、シンガポール、マレーシアなど約300名の多国籍の参加者が乗船した。船内での多くの企画は英語の通訳を入れて行った。(映画上映は日本語、英語、中文、韓国語で理解できるようにした。)

《企画一覧》

1. 広島・長崎の原爆や世界各地の核実験が人間にもたらした被害の実相を伝える

証言会:「記憶を越えて 福島富子さんが語る「生きる」ということ」(5/2)
紹介企画:「世界をめぐる平和のメッセージ」(5/6)
証言会:「被爆者からのバトン」(5/8)
講座:「ヒロシマを歩く ～平和公園が物語る平和のメッセージ～」(5/29)
対談:「デザイナーとしての伊ッセイ・ミヤケ、被爆者としての三宅一生」(6/1)
対談:「イサム・ノグチの平和記念碑へのこだわり」(6/2)
対談:「ヒロシマを生きたヴァイオリン パルチコフへの記憶を辿って」(6/22)
証言会:「風下住民の私の証言」(6/23)
展示会:「写真が伝える核実験被害」(6/23～6/28)
映画上映:「SIRENT FOLL OUT -乳歯が語る大陸汚染-」(6/24、6/25、8/6)
対談:「映画「SIRENT FOLL OUT」で伝えたかったものとは」(6/24、6/25)
講座:「隠された真実を明かす「証言の力」」(6/28)
紹介企画:「海を越えて生きる、私の人生」(7/2)
証言会:「記憶がなくても語り継ぐ想い」(7/4)
朗読:「歌にのせて受け継ぐ鎮魂と平和への祈り」(7/17)
講座:「長崎さるく -倉守さんと歩く長崎の街-」(7/30)
講座:「紙芝居から知る写真の物語」(8/1)

2. 世界の核問題への理解を深める

講座:「被爆者からみた原発事故 -チョルノービリを想う-」(4/26)
展示会:「チョルノービリ原発事故写真展」(4/26～5/5)
展示会:「おりづる図書館」(5/17、5/24)
講座:「おりづるクイズはじまるよ!」(5/19)
対談:「核戦争の世界を検証する」(5/31)
講座:「海を越えた憲法9条」(6/1)
対談:「折り鶴から始まる核なき世界」(6/19)
映画上映:「ブラジルに生きるヒバクシャ」(7/1)
映画上映:「ヒロシマへの誓い」(7/27、8/6)

3. 世代と国境を越えた多くの人々とともに、戦争や核兵器をなくすための具体的な取り組みや継承について考える。

対談:「ノーベル平和センター洋上特別展スペシャルトーク」(4/26)
対談:「朝鮮・韓国人から見たヒロシマ・ナガサキ」(5/13)
ワークショップ:「まっさんと羽ばたく折り鶴を折ろう」(5/15)
ワークショップ:「へいわの色ぬり ~あなたのへいわはどんな色?~」(5/25)
対談:「教えて、まっさん! -平和って理想論ですか-」(5/26)
ワークショップ:「絵本で見るへいわ」(5/27)
交流会:「おりづるティータイムはじまるよ」(5/30)
証言会:「戦争の記憶から平和の対話へ ~戦争も核もない未来をともに描く~」(6/7)
対談:「アウシュヴィッツの経験を今の世界にどうかすのか」(6/13)
ワークショップ:「Sueさんと折り鶴を折ろう」(6/20、6/22、6/26)
交流会:「おりづるフレンズ」(6/24)
対談:「記憶をどう継承するか」(6/26)
交流会:「Sueさんとおしゃべり」(6/27)
演奏会:「ピースコンサート -被爆ヴァイオリンが繋ぐ記憶-」(6/28)
対談:「世界を巡る平和の船から生まれた、ひとつのうた」(7/18)
対談:「TIME FOR PEACE の歌×おりづるプロジェクト「しっとり語る」」(8/1)

● 詳細

ホームページ(日) <http://peaceboat.org/projects/hibakusha>
ホームページ(英) <http://peaceboat.org/english/?page=view&nr=83&type=28&menu=105>
ブログ(日) <https://hibakushaglobal.net/>

● メディア掲載情報(一例)

2025年4月23日 NHK 広島
広島・長崎の被爆者ら船で世界各地へ
”核兵器廃絶など訴え”

広島 NEWS WEB

広島・長崎の被爆者ら船で世界各地へ”核兵器廃絶など訴え”

04月23日 18時27分



戦後80年となることし、世界各地を船でめぐって核兵器の廃絶などを訴えようと、広島や長崎の被爆者などを乗せた船が横浜港を出発しました。

国際NGOの「ピースボート」は、被爆者らと船で世界各地をめ

ぐり核兵器の廃絶や平和を訴える活動を続けていて、23日からの航海ではおよそ3か月の日程でアメリカやヨーロッパなど18か国を訪れます。

2025年4月23日 NHK NEWS
戦後80年 被爆者らのせた船が出発
核廃絶訴え世界各地を航海



戦後80年 被爆者ら乗せた船が出発 核廃絶訴え世界各地を航海

2025年4月23日 14時40分

戦後80年となることし、世界各地を船でめぐって核兵器の廃絶などを訴えようと、広島や長崎の被爆者などを乗せた船が横浜港を出発しました。

2025年6月6日 テネリフェ地元新聞

Historia

El barco japonés "Peace Boat" hace escala en Tenerife para que los visitantes puedan conocer, de primera mano, los testimonios de los afectados por las bombas atómicas de Hiroshima y Nagasaki

Supervivientes acercan el horror de la guerra nuclear a Canarias

CLAUDIA MORIN
Sonia Chacón de Tenerife

Tenerife Kuramori tenía apenas un año cuando una bomba atómica destruyó su ciudad natal, Nagasaki, y más de 75.000 personas. Aunque de forma directa no recuerda el momento exacto del impacto, sí recuerda a su familia de cómo reaccionó su infancia, marcada por la guerra nuclear. Su hijo, que estaba jugando en el patio, se cayó por la ventana y cayó a unos 5,8 kilómetros. Aun así, tuvo que ir a parar a un hospital y su hermano, mientras su padre se quedó para ayudar con los heridos y los edificios que habían quedado destruidos. Ahora, después, su hermano



«A los 15, tras la muerte de mi padre, me vi forzado a trabajar y terminé enfermado»
MASAO ITO
SUPERVIVIENTE DE HIROSHIMA



«Mi padre y mis hermanos fallecieron por culpa de la radiación y apenas pude despedirme»
TERUMI KURAMORI
SUPERVIVIENTE DE NAGASAKI

guerra nuclear. Movida por el dolor, pero también por la esperanza y el coraje, participa en un cruceo al Pacífico que recorrerá por el mundo y que durante décadas ha estado prohibido a los supervivientes. Un cruceo por la paz. Antes de partir hacia Oporto, el cruceo Peace Boat - también denominado Pacific World - pasará unos días estacionado en la Terminal capitalina, como parte de su 120º Viaje Global por la Paz, una travesía con la que quienes el mundo escuchó el relato de los supervivientes. Esta ocasión el barco japonés será la única que haga un recorrido español. Su itinerario es muy similar a los circuitos de cruceos que pasan al

Para acercar a los canarios a lo ocurrido en Hiroshima y Nagasaki, han montado la exposición itinerante Un mensaje a la humanidad. Dentro de ella también se puede conocer y escuchar los testimonios de dos supervivientes, Terumi Kuramori y Masao Ito. Este último, 100, tenía cuatro años cuando la bomba atómica cayó sobre Hiroshima. Para él era un día normal, estaba montando en trío por fuera de su casa, a 5,8 km del epicentro, cuando se inició la explosión que causó la muerte a 140.000 personas - en una localidad que por aquel entonces apenas superaba los 300.000 habitantes. El japonés relata que le golpeó el pecho y se cayó al suelo, pero no se acordó de lo que le pasó después. Aunque sobrevivió a la bomba en un momento, su vida cambió para siempre. Cinco años después, su padre enfermó y no pudo trabajar más. Su compañía se fue a buscar de los 17 años. «Era un trabajador muy difícil para mi hijo, una agotadora», subraya. Al realizar grandes esfuerzos también tenía

2025年6月22日 中国新聞
被爆者ら核軍縮起点の地へ



2025年6月22日 東京新聞
核軍縮の出発点 被爆者らが訪問
アイスランド



2025年7月28日 共同通信
ピースボート特別プロジェクト
被爆、戦禍 語り合う船旅



2025 年 7 月 29 日 カナダ地元 WEB 記事

